2021年(令和3年)10月29日

ほっかいどうNIE通信

第98号

Newspaper in Education

発行　北海道NIE推進協議会　〒060-8711　札幌市中央区大通西3丁目6　北海道新聞社内　☎011-210-5802　FAX011-210-5826

北海道新聞ホームページ「NIE」(https://nie.hokkaido-np.co.jp/)でバックナンバーから閲覧できます

札幌から「新しい学び」発信

全国大会　全体会ライブ中継

第26回NIE全国大会札幌大会（日本新聞協会主催、北海道NIE推進協議会など主管）が8月16日、新型コロナウイルス感染予防のため、オンラインで開かれた。基調講演やパネルディスカッションなど全体会は、札幌文化芸術劇場ヒタルからライブ中継された。公開授業や実践発表は、全25プログラムがオンデマンドで配信されており、NIEを通じた「新しい学び」を札幌から全国に発信している。

（パネルディスカッションは2～4面、基調講演は5面に詳報）

コロナ予防 オンライン開催

基調提案を述べる菊池安吉・大会実行委員長

大会スローガンは「新しい学びを創るNIE～家庭、教室、地域をむすぶ～」。日本新聞協会の丸山昌宏会長は「新聞を読んで情報リテラシー、読解力を向上させることが、学びの基礎になる」とNIEの重要性を強調した。

基調提案で、大会実行委員長も務めた推進協議会の菊池安吉会長は、予想困難な挑戦の時代を生き抜くために、物事を俯瞰（ふかん）する「鳥の目」、掘り下げる「虫の目」、時代の流れを見る「魚の目」を持つことの重要性を指摘。その上で「新聞にはその全てが織り込まれている」と述べ、教育に新聞を活用する意義を訴えた。

基調講演は、ノンフィクション作家、梯久美子さんが「歴史と出会う――新聞という回路」をテーマに話した。梯さんは、米軍との激戦となった硫黄島の戦いを描いたデビュー作「散るぞ悲しき　硫黄島総指揮官・栗林忠道」の執筆の動機について、栗林中将が大本営に送った決別電報の一部が改ざんされて新聞掲載された事実を知り、「このことを伝えるべきだ」と思ったことなどを紹介した。

パネルディスカッションは、元北海道日本ハムファイターズ選手で、来春、札幌に私立小学校を開校する学校法人田中学園理事長の田中賢介さんをはじめ、大会スローガン「家庭、教室、地域」の立場から主婦や高校生、教諭、地域活動に取り組む夫妻ら7人のパネリストが、それぞれの立場から新聞や新聞を使った学習について話し合った。

大会では地元高校生が、大会の様子を伝える新聞制作や司会、パネリスト、手話通訳で活躍した。

オンライン開催は、前回の東京に続いて2大会連続となった。

次回、第27回全国大会は来年8月、宮崎市で開かれる。

新聞を使った学習について話し合われたパネルディスカッション

1217人参加 11月末まで配信

NIE札幌大会のオンデマンド参加申し込みは、1217人となった。8月16日にライブ中継された全体会（基調講演、パネルディスカッションなど）は777人が視聴した。

オンデマンド申込期間は、7月5日から8月31日まで約2カ月間。北海道内453人、道外からは764人だった。

公開授業、実践発表は全体会終了後、順次配信が始まり9月中旬に全25プログラムがそろった。全体会も配信されている。視聴は11月30日まで、大会ホームページの特設サイト(https://nie.hokkaido-np.co.jp/zenkoku/ondemand/)で見られる。

基調提案（要旨）

菊池安吉・大会実行委員長による基調提案（要旨）は次の通り。

◇

大会では、新学習指導要領で目指す「生きる力」を育成するため、キーワードを「新しい学び」とし、教育活動で新聞を活用することで育成できる、新しい子どもの学びの姿を授業や実践発表で検証していきたいと考えます。

公開授業、実践発表とも二つの視点を持って取り組みました。視点①は言語活動、体験的な活動を取り入れた学習。視点②は次の学びのステップにつながる新聞を活用した学習です。

新型コロナ下に生活することを余儀なくされている子どもたちは、現代史の目撃者です。フェイクニュースやデマに振り回されることなく、情報を見極めるメディアリテラシーを身につけさせ、自分の頭で考える「新しい学びを創るNIE」を北海道から発信します。

パネルディスカッション

NIE札幌大会の全体会で行われた、ノンフィクション作家、梯久美子さんの基調講演（テーマ「歴史と出会う――新聞という回路」）と、「家庭」「教室」「地域」それぞれの立場から新聞やNIEについて話し合ったパネルディスカッションの内容を紹介する。基調講演は5面に掲載。

（記事と写真は北海道新聞社提供）

パネリスト7人

鈴木桃子さん、翼さん夫妻
（別海町で秋サケ定置網漁などを営む）

田中賢介さん
（元北海道日本ハムファイターズ選手、学校法人田中学園理事長）

司会 松本裕子さん（フリーアナウンサー）

新聞のある生活

為国さん 友達との会話で重要
浜田さん 幅広い知識得られる
田中さん 年代で読む記事変化

――みなさんにとって、新聞はどんな存在ですか。

内山 会社員を経て（夫のUターンを機に）美唄市に移住し、アスパラ生産などの農業を営んでいます。2世帯6人で暮らし、新聞は4紙取っています。農業の業界紙は欠かせなく、中学1年の長女と小学5年の長男用に子ども新聞も購読しています。考え方に偏りが出ないよう、全国紙は数年おきに代えて読んでいます。

古畑 高校の授業における教材の一つで貴重な情報源でもあります。校内には（世界文化遺産に登録された）北海道・北東北の縄文遺跡群の記事などが貼られ、学校図書館では新聞の閲覧や記事データベース（DB）での検索など、あちこちで目に触れることができます。

為国 小さい頃は「読む必要があるのかな」と思っていましたが、高校の友達と話す時にニュースが話題になることがあり、コミュニケーションを取る上で重要です。

浜田 世の中の情報はテレビやラジオ、インターネットで知ることができますが、新聞はそれらが伝えきれない幅広い知識を広げてくれます。高校に入ってから読むようになりました。

鈴木翼 秋田県出身で旭川の大学を卒業後、妻の実家の家業を継ぎ、秋サケ定置網漁などを営んでいます。私が住む地域では約500世帯のほとんどが新聞を購読しています。漁協青年部で魚の販売会を開く際、地域面に載せてもらうとお客が多く、新聞の影響力の大きさを実感します。

田中 実家が小さな印刷会社で、幼い頃からスポーツ紙の野球記事などを読んで育ちました。プロ野球選手になって記事に載る側になり、どのように話せば真意をくみ取って書いてくれるか、取材を受ける難しさを感じました。引退後は新聞コラムなどを通じ、選手らを取材する難しさも感じており、新聞には全方向から関わっています。

――4紙を購読する内山さんの子どもはどんな記事に興味を持っていますか。

内山 自然環境や昆虫、動植物などの記事に興味があるようです。長女はごみ問題や紛争、難民に関する記事に「こんなことがあるなんて知らなかった」とショックを受けつつ読んでいます。最初は子どもたちに「読みなさい」と言っていましたが、自分から手に取るようになり、成長を感じています。

田中 私も4紙を取っており、小学生の長男は子ども新聞を読み、まだ字があまり読めない次男は、好きなパンダの記事の写真などを見ています。好きな記事を読むことで視野が広がり、年代によって読む記事が変わっていくのが新聞の良さだと思います。

――一般紙の部数が軒並み減る中、子ども向け新聞は部数を維持または増えているそうです。なぜ読まれていると思いますか。

為国 子どもに合わせた記事を作っているからだと思います。天文学に関する記事や英語の和訳なども載っていて、とても勉強になります。

浜田 スポーツや音楽など私たちの興味がある記事が多く載っています。小中学生は文章を読むのが苦手な人が多く、私も好きではありませんでしたが、子ども向け新聞は手に取りやすかったです。

――鈴木さんが住む別海町の野付小・中学校では、授業が始まる前に新聞を読む「NIEタイム」を月1回設けています。

鈴木桃子 野付中のスクールサポートスタッフとして、図書室の整備などに携わっています。NIEタイムでは新聞を取っている世帯が多いからか、どの子も抵抗感なく取り組んでいま

3面に続く

家庭　教室　地域から

内山佳奈さん
（美唄市のアスパラ生産農家）

古畑理絵さん
（札幌藻岩高校教諭）

為国結菜さん、浜田亮太さん
（札幌藻岩高校2年）

2面から続く

す。生徒と地域の人がグループになり、一つの新聞から一番気になる記事を選んで意見を書く「まわしよみ新聞」という活動もしています。選ぶ記事が重なることは意外となく、スポーツに興味を持つ子がいれば、他地域の漁業関係の記事を選ぶ子もいました。

コロナ禍と新聞

鈴木桃子さん　子どもも読むように
古畑さん　存在意義さらに増す

――世界各国で新聞の発に「一覧性」がありますが、今は「知りたくないことは目に入らなくていい」ということがまかり通っているように感じます。事実というのは複雑で白黒付けられるものではなく、結果がすぐに分からないものは「難しい」「面倒くさい」という風潮になっているのかもしれません。

――日本新聞協会広告委員会の調査によると、新型コロナウイルスの感染拡大以降、新聞に触れる機会が「増えた」「やや増えた」との回答が合わせて約40％に上ったそうです。コロナ禍で新聞を読む頻度は増えましたか。

鈴木桃子　子どもたちが新聞を読むようになったと感じます。コロナに対する不安からなのか、感染者数などをよくチェックしているようです。

古畑　コロナ禍は読者が記事で求めていることが明確になり、新聞の存在意義がより増したと思います。ネットでワクチンに関する情報などを見て、不安になることもありますが、翌日に配られる朝刊を見て客観的な事実を知り、ホッとする時もあります。新聞は最終的なチェックができるものだと気付いた人も増えたのではないでしょうか。

田中　コロナ禍で「情報が欲しい」と、多くの方が読んでいるのだと思います。正確な情報を伝えてきた新聞の実績の表れではないでしょうか。

――日本新聞協会によると、NIEで学力は伸びるとのデータがあります。全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の小学6年を対象にした「国語A」の正答率では、新聞をほぼ毎日読む児童と読んでいない児童とでは10ポイント以上の差があったそうです。

古畑　国語教師として、新聞のような文章に触れる機会が多ければ多いほど、点数が上がるのは当然だと感じています。データで注目すべきは、算数や数学の結果にも影響を与えていること。新聞を読解する力が他の教科にも好影響をもたらしているのだと思います。

鈴木桃子　新聞に出てくるグラフは算数や数学につながりますし、記事の内容を理解するために、知らない言葉の意味を調べることは国語に関わります。新聞を読むことは、学びのさまざまな分野につながっていると思います。

浜田　新聞を継続的に読むことで、学力は上がっていくのではないでしょうか。新聞にはたくさんの文章表現があり、テストのアドバイスや学習に役立つ記事もある。そういう面からも参考になります。

内山　テストの点数だけではなく、新聞を通じて物事を考え、視野を広く持つことで、社会に出た時に役立つことが育っているのかなと思います。点数にとどまらない学びを得られるのが新聞だと思います。

田中　子どもたちがいきなり親に「新聞が読みたい」と言うことはないはずです。親が子どもと関わるツールとして新聞を読むことで、自然と学力が上がるのではないでしょうか。子ども新聞は親子で対話できるクイズ形式などになっており、子どもに「刺さる」内容になっています。そのためには新聞を読まなくなった世代の親がいかに読むかがすごく大事になります。

――新型コロナの感染拡大は教育現場にも影響を及ぼし、小中学生に情報端末を1人1台ずつ配布する「GIGAスクール構想」が前倒しで進められました。

為国　新聞のサイズが大きい。子どもが広げて読むには大変で、大人もあれだけの分量を小さな文字で追っていくのは大変です。スマートフォンなどで必要な記事だけサッと見る人が増えたのだと思います。

浜田　新聞はネットニュースに比べて内容が詰まっている分、読み応えはありますが時間がかかります。手軽に情報を入手するとなると、ネットニュースになってしまいます。

古畑　新聞の大きな特長行部数が減っています。なぜだと思いますか。

4面に続く

3面から続く

浜田　授業で「環境に優しい商品」を調べてまとめる時に、学校のパソコンを使いました。地域の課題について調べる総合的な学習の授業では、ウェブ会議システムZoom（ズーム）を使うことで、コロナ禍でも関係者のインタビューを行うことができました。

――デジタル教科書の本格導入に向けた議論も進んでいます。

為国　私はあまり好きではありません。デジタル教科書は（端末上で電子的に）書き込むことが多いですが、ノートに自分で文字を書いた方が記憶に残るし、テスト勉強などに役立つと思います。デジタルだと、書き込んだデータが消去されてしまう恐れもあります。

鈴木翼　重い紙の教科書を何冊も持ち歩かなくて済むようになり、教材の読み比べなどでもメリットが大きい。ただ、活用方法は現場の先生に丸投げせず、共通の指針や専門教員を配置することが必要になると思います。

進むデジタル化

鈴木翼さん　活用の指針を示して

内山さん　調べ学習に記事DB

――デジタル化のメリットの一つに記事データベースがあります。授業で使う予定はありますか。

古畑　漢文で故事成語を学びますが、現代における使われ方を学ぶことが学習目標の一つになっています。「塞翁（さいおう）が馬」「虎の威を借るキツネ」などをキーワードに記事検索し、キーワードを伏せ字にして出題したり、生徒自身が探し出して使い方を調べたりできると思います。

内山　小学校では自分が住む地域の歴史や産業、政治を学びますが、副読本や教科書だけではなく、子どもたちが知りたいと思った時に調べられる教材として、記事データベースを使用できたらすごく良いと思います。

――今の新聞って、面白いのでしょうか。

為国　私には面白いです。でも、文字の羅列で眠くなったり、集中力が途切れたりすることはあります。参考書を選ぶ時、白黒の文字ばかりより、イラストや写真が多くあるものを買います。新聞ももう少しそうであってほしいです。

――田中さんは札幌市内に来春開校する小学校で情報通信技術（ICT）を使った教育を重視しますか。

田中　学校におけるICTは、文房具のように当たり前の存在になると思います。算数の授業ならデジタルドリルのような形で問題をどんどん解き、間違いやすい問題の傾向を人工知能（AI）に教えてもらう。一方で、深くゆっくり学ぶべきことは、従来通りの教育でも良いと思います。

――新聞に話を戻すと、

浜田　読むことで能動的に知識や情報が得られる新聞は私にとっても面白いです。その面白さを知ってもらうためには、子どもの頃から新聞に触れる習慣をつけることが大事ではないでしょうか。

――これからの新聞とNIEに何を期待しますか。

古畑　新しい学習内容である「グローバル化」や「地域創生」「持続可能性」は、新聞社が日々取材を続けている得意分野です。引き続き公正、公平な立場で、客観的な事実を報道してほしいです。

内山　NIEを通じて新しい言葉と出合い、その意味や使い方を知ることで、自分たちの世界が広がる教育に取り組んでほしい。そのためには新聞社は、子どもたちが社会の課題を自分のこととして問題意識を持てるような紙面作りをしてほしいです。

鈴木翼　新聞社は地方にたくさんあり、地域の人たちの声を拾いやすい。法律や制度の影響を受けている人の声は、困っていても届かなかったりします。そうした部分での発信に期待しています。

田中　現役時代から新聞は好きでしたが、NIEについては知らなかった。学校を始めるにあたり、新聞を使った授業をやりたいと思いますし、小学6年間を終えた時、子どもたちが「新聞を読むのが楽しい」と思える教育をしたいです。

成果と課題を共有

全国大会　参加教諭ら振り返る

NIE札幌大会の最後の全体会が10月1日、約40人が参加しオンラインで開かれた。公開授業や実践発表を担当した教諭らが大会を振り返り、成果と課題を共有。大会実行委員長を務めた、北海道NIE推進協議会の菊池安吉会長は「今回得た財産を生かして、NIEの裾野を全道に広げたい」と、活動の一層の浸透を期待した。

推進協議会の髙辻清敏顧問は「地域色を生かしたテーマの実践例が多く、全国の教育関係者の参考になった」と大会を講評した。

全国大会に参加した教諭が「成果と課題」を発表した全体会

各分科会からの報告では、NIE初体験で小学国語の授業を公開した札幌市立桑園小の夏井彩教諭が「新聞を使うことで、自分の主張にあった資料を取捨選択する力が身についた」と児童の成長を紹介した。

NIEの広がりが期待される「特別支援学校（級）」での実践は2教諭が発表。岩見沢高等養護学校の曳田和樹教諭は「肢体不自由者が新聞を授業で活用するには、さまざまな課題があることが浮き彫りになった」と話し、継続的な取り組みに向けて課題解消へ意欲を示した。札幌市立藤野中の三上毅朗教諭は、持続可能な開発目標（SDGs）に関わる「フードロス」を考える授業で新聞を使い、「社会的な問題と生徒をつなぐことができた」と述べた。

近代北海道の発展を支え、空知の炭鉱などから構成される日本遺産「炭鉄港」を地域教材として取り上げた市立美唄中の鹿糠昌弘教諭は「新聞で過去・現在・未来を見つめた。地域面の役割が大きかった」と話した。分科会を司会した市立ゆうばり小の冨樫忠浩教諭は、「NIEを通して、自分たちの町に誇りを持たせる授業づくりのモデルケースになれば」と期待を込めた。

基調講演

歴史と出会う ― 新聞という回路

ノンフィクション作家　梯久美子さん

新聞は「時代の声」を刻印

地方紙の役割一層重要に

私はデビュー作「散るぞ悲しき」で、1945年3月に米軍との戦闘で日本軍が全滅した、東京都小笠原諸島の硫黄島で起きたことを書きました。

硫黄島の総指揮官・栗林忠道中将は、2万人の兵士を率いて、5日で落ちるという米軍の予想を覆して36日間島を死守した人です。

取材をする中で、栗林さんが玉砕の前に大本営に送った決別電報にある辞世の一部「散るぞ悲しき」が、「散るぞ口惜し」に改ざんされて当時の新聞に掲載されたことなどが分かりました。

電報の原文を確認すると、「散るぞ悲しき」の「悲しき」に2本線が墨でひかれ、その横に赤で「口惜し」に書き直されていました。電報を受け取った大本営の作戦部が改ざんしていたのです。「散るぞ悲しき」という言葉が士気を下げると思ったのでしょう。

栗林さんも最高指揮官が「悲しき」と書くのはタブーだと分かっていたのではないかと思います。それでもあえて書かずにいられなかった。部下が武器も弾薬も水もなく絶対死ぬと分かる戦いをしている悲惨さを、後世に伝えようとしていたのではないでしょうか。

決別電報と同じ紙面には、「本土決戦」などの言葉が躍っています。目的の記事だけではなく、同じ日に載った他のニュースからも、日本がどういう時代だったかがリアリティーをもって伝わってきます。

栗林さんは決別電報が新聞に載ることを予測していました。新聞を通じて、戦地の悲惨さを伝えようとした指揮官がいたこと、その最後のメッセージが国民に伝わらなかったことを知った私は、このことを伝えるべきだと思いました。

3年前に原民喜の評伝を書きました。広島で被爆した経験を「夏の花」という小説に書いた作家です。他人とうまくコミュニケーションができない、いまでいう引きこもり気質の人でしたが、文章を書くときだけは自分らしくいられた。こういう人を通して今の若い人に原爆について知ってもらうことはできないかと思いました。

原民喜は鉄道自殺で亡くなりますが、その直前に地元広島の中国新聞社に、「永遠のみどり」という有名な詩を郵送しています。希望を感じさせる詩です。若い人たちに希望を託して、自分は静かに世を去っていく。原爆を経験したふるさとの人たちに向けた別れのあいさつだったのではないかと思います。新聞には、ある時代を生きた人の声も刻印される、と感じました。

私は原爆について調べる時、中国新聞がインターネット上に開設しているサイト「ヒロシマ平和メディアセンター」を活用しています。原爆に関する記事や過去の特集を無料で読むことができる充実したサイトです。このような地元の歴史にかかわる取り組みを、他の新聞社でもぜひやっていただきたい。戦争体験者の証言を読んだり、戦争について新聞で何がいつどのように書かれ、あるいは書かれなかったのかを知ること。それは、歴史とは個人の人生の集積であることを実感し、また、時代によって戦争に対する考え方が変わっていくことに気付くきっかけになります。

地方紙の役割はこれからさらに大きくなっていくと私は考えています。子供たちが、自分を育んだ土地で何があったのかを知ることは大切です。途切れることなく、日々発行されてきた新聞だからこそ、教育のためにできることがあると思います。

かけはし・くみこ　1961年、熊本県生まれ、北大文学部卒。札幌市在住。太平洋戦争の硫黄島総指揮官・栗林忠道を描いた「散るぞ悲しき」で2006年、大宅壮一ノンフィクション賞。作家島尾敏雄の妻ミホの評伝「狂うひと」で17年、読売文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞、講談社ノンフィクション賞。18年、評伝「原民喜」を著した。近現代史における戦争と人間というテーマなどで執筆し、学校教科書にも作品が掲載されている。

全国の「子ども新聞」動画で紹介

NIE札幌大会の関連イベントとして開かれた「子ども新聞展示会」（北海道NIE推進協議会など主催）の様子を伝える動画が、大会ホームページの特設サイト（https://nie.hokkaido-np.co.jp/zenkoku/ondemand/）でオンデマンド配信されている＝**写真**＝。11月30日まで。

展示会は、日本新聞協会加盟社に呼びかけて寄せられた38社の計45点を紹介。札幌大会主管社の北海道新聞本社のイベントスペースで大会開催に先だって開かれた。

動画は約11分。迫力ある大きな写真を使っている、文字が大きく読みやすい、身近な地域の情報が多い―など、各紙の「読ませる工夫」などを一つ一つ紹介している。

「炭鉄港」新聞で学び深める

特別分科会　公開授業を二元中継

ＮＩＥ札幌大会の特別分科会「日本の産業基盤を築いた日本遺産『炭鉄港』」が８月17日、オンデマンド配信に向け収録された。「地域教材」を活用した学びをより深めるために新聞をどう使えば効果的か。かつての産炭地にある市立美唄中と札幌の特設会場をオンラインで結び二元中継された３年生の公開授業からヒントを探った。

美唄中―札幌で質疑、助言

「過酷な労働は命懸けだった。帰りを待つ家族の不安を思うと胸が苦しくなる」。男子生徒は１９８１年、北炭夕張新鉱事故の生存者の証言を記事で読み感想を述べた。発言は旧産炭地・空知地方の過去と現在を学んだ直近２回の授業を振り返った時だった。

鹿糠昌弘教諭は、暮らしや労働についての記事のほか、93人が犠牲になったガス突出事故の生存者の記事を紹介し「家族の気持ち」を強調した。授業では未来に向け「炭鉄港」関連の菓子開発に取り組む三笠高生や、空知地方と鹿児島県の小中学校をオンラインで結んで、炭鉱について学ぶ記事にも触れた。

生徒29人はタブレット端末で、この中から関心ある記事を選び「食を通じて炭鉄港を学べる」「小学生から地元を知り、遠くの人と交流するのは貴重な体験」などと理由を述べた。

炭鉱閉山で過疎化が進む空知地方の記事も使った。最盛期には9万人を超えた美唄市の人口は現在２万人。鹿糠さんは美唄の次世代がマチのイメージをどうプラスに変えていくか問いかけた。生徒はグループ討議から「美唄らしさのある街をつくりたい」「歴史を守り抜いた人たちに代わり私たちが次につなげる」と積極的なアイデアを出した。

美唄中の炭鉄港についての学習は３年がかり。１年社会科地理は世界の諸地域、２年の歴史は産業の近代化、３年では公民のまちづくりに絡めて学ぶ。旧三菱美唄炭鉱の立て坑やぐらなど町内見学も行い、じっくりと種をまいてきた。

鹿糠さんは18歳選挙を生徒に意識してもらい、「自分たちがまちづくりをしていくことを再確認してほしい」と授業を締めた。

◇

札幌の特設会場で、分科会の司会を務めた市立ゆうばり小の冨樫忠浩教諭（ＮＩＥアドバイザー）は、生徒は炭鉄港を取材した新聞記事を通して多くの先人や地域の人と「対話」した。今後、求められる「ＮＩＥの新たな可能性」と指摘。

道教委学校教育局の安藤俊介主査は、地域教材の炭鉄港は社会科では歴史、地理、公民などいろいろな切り口で活用できる。明確な視点を持つことで、より効果的に学習を深められると助言した。

炭鉄港をテーマにした美唄中の授業をオンライン中継した札幌の特設会場

炭鉄港　空知地方の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港などからなる日本遺産。2019年５月に認定された。北海道の近代化を支えた産業がエネルギー政策転換で衰退した歴史に光を当てた。各地の炭鉱跡や旧国鉄手宮線など構成文化財は45件（空知地方などの12市町）に及ぶ。炭鉱は三菱美唄炭鉱立て坑やぐらや夕張の北炭施設なども入る。空知の炭鉱は1879年（明治12年）開抗の幌内炭鉱（三笠市）以降、増え続け1960年代には最多112を数えたが、95年の空知炭礦（歌志内市）閉山で一時代を終えた。

地区セミナー　オンラインで再開

ＮＩＥ札幌大会開催のため中断していた本年度ＮＩＥ地区セミナー（北海道ＮＩＥ推進協議会主催）は、新型コロナウイルス感染拡大予防のためオンラインで再開した。

社説４紙読み比べ　日胆セミナー

第15回日胆地区セミナー（日高ＮＩＥ研究会共催）が10月９日、推進協議会の事務局を務める北海道新聞社の苫小牧支社を拠点に開かれ＝**写真**＝、道内各地の教諭や学生ら35人がＮＩＥへの理解を深めた。

従来の公開授業は、事前に録画した授業を使って「授業実践発表」として行われ、町立えりも中の上岡弘佳教諭が３年社会「マスメディアと世論」の授業を紹介した。上岡教諭は４紙のパラリンピックについての社説を読み比べさせて、なぜ新聞社によって論調が違うのかを多角的に考察させた。参加者からは「もっと考える時間を増やしては」などの発言があった。

実践発表は、町立浦河東部小の斉藤美衣（みえ）教諭が１年国語「しんぶんとなかよし」、苫小牧市立日新小の矢島勲、同澄川小の坂井弘、同明野小の上田真太郎の３教諭が「地域の新聞社と連携したＮＩＥ推進活動」をそれぞれ発表した。

ＬＧＢＴを考える　釧路セミナー

第19回釧路地区セミナーが10月23日、北海道新聞釧路支社を拠点に開かれ、釧路管内の小中高校の教諭や大学生を中心に約40人が実践例を学んだ。

釧路東高の山岸皇（みこと）教諭は３年倫理「現代の諸課題と倫理」の授業を録画映像で紹介。今年６月、ハンガリーがＬＧＢＴなど性的少数者に関する描写を禁じる新法を制定した記事を生徒に読ませ、「同性愛が宗教で禁止される社会は生きづらい」などの感想があったことを話した。

実践発表は弟子屈町立和琴小・味元広恵教諭が特別支援学級６年の新聞作りを通じた児童の成長について、浜中町立霧多布中・佐藤健翔教諭は３年社会で、歴史関連の記事を活用したメタ認知能力の育成について、それぞれ報告した。

ＮＩＥ札幌大会 高校生も活躍

「記念新聞」「パネリスト」「手話通訳」「司会」。ＮＩＥ札幌大会では、地元の高校生も部活動の経験を生かして大会を支えた。オンライン開催となり「全国からの参加者を前に」との思いはかなわなかったが、それぞれの分野で力を発揮した。６校から集った生徒の活躍と感想を紹介する。

記念新聞　札幌啓成高　札幌旭丘高

大変だった。1日で作る

札幌啓成高、札幌旭丘高両校の新聞局員が担当。題字は北海道での大会にちなんで「蝦夷瓦版（えぞかわらばん）」とし、Ａ３判裏表２ページの紙面を作った。

札幌啓成高は表面を担当。開会式、基調講演、パネルディスカッションを紹介するため全局員８人が分担して取材、執筆、編集に取り組んだ。

局長の後藤夏樹さん（２年）は「大舞台で新聞を作ることができて良かった」。村上戒彗（かいえ）さん（２年）は「貴重な経験になった」と喜ぶ。記事入力でフル回転した富山菜結希さん（２年）は「１日で新聞を作るのは想像以上に大変だった」と振り返る。高田有彩さん（２年）は梯久美子さんが講演した戦時下の話を聞き「とても興味深かった」と言う。

１年生も多くの経験を財産にした。新保彩夏さんは「メモを確実に取ることが記事に使いやすいと思った」。伊藤咲羽（さはね）さんは「新聞制作への意欲が湧いてきました」という。川上紗蘭さんは取材のメモにてこずったようで「改善したい」と誓う。カメラを担当した飯野里穂さんは「写真の撮り方が上手になりたい」と前向きだった。

札幌旭丘高は裏面を担当。学校の始業日の関係で当日参加できなかったため、大会前に完成させ、コロナ禍で道内の高校新聞局の活動が停滞した記事などを掲載した。局長の権瓶（ごんぺい）春菜さん（２年）は「学校以外の話題を記事にしたのは新鮮だった」と言う。当日参加できなかったことについて、清水果穂さん（１年）は「実際に取材して対応力をつけたかった」と残念がる。

札幌啓成高との活動では刺激を受けた。吉田由樹伯（ゆきのり）さん（２年）は「記事を見比べることで、自分たちの新聞制作を考察できた」。瀬高亜衣子さん（１年）は「いろいろな意見を聞けた」。菅原ひまりさん（２年）も「貴重な経験になった」と技術向上へのヒントを得たようだった。

高校の新聞作りに取り組む札幌啓成高の新聞局員

1年生をリードした札幌旭丘高の（左から）菅原さん、権瓶さん、吉田さん

パネリスト　札幌藻岩高

考えた。もっと読みやすく

７人が登壇したパネルディスカッションには、札幌藻岩高図書局の２人が顧問の教諭と参加した。局長の為国（ためくに）結菜さん（２年）は新聞の面白さを話す一方、「どうすれば高校生にとって読みやすくなるかを考えました」と、写真などをもっと使うよう発言し工夫を求めた。

浜田亮太さん（２年）は思い出に残る経験と位置づけ「いろいろな方と出会い、さまざまな意見を聞くことができた」。

若い感性で意見を述べる為国さん（左）と浜田さん

手話通訳　石狩翔陽高

全力。自信持ってできた

石狩翔陽高ボランティア局の３人が、開会式で司会のアナウンスを正確で、スムーズに通訳した。学校で練習を重ねるとともに、大会前に司会の高校生と話すスピードや間合いを調整したことも生かした。

局長の長沢明穂さん（３年）は「いい経験。新聞の見方が変わりました」。太田夏南海（ななみ）さん（３年）は「自信を持って手話ができました」。高関優月さん（３年）は「全力を出せました」と話す。

開会式の手話通訳を担当した（右から）高関さん、長沢さん、太田さん

司会　札幌北高　札幌日大高

緊張。でも楽しかった

共に放送局員の札幌北高の古崎可純（かすみ）さん（３年）と札幌日大高の山田涼平さん（３年）が、ライブ中継された全体会を担当した。開会式や次回開催地・宮崎県の主管社から届いたビデオメッセージの披露などを、ほぼ２人でアナウンスした。

古崎さんは「コロナ禍で話す機会がなくなっていた。大役は緊張したが、楽しかった」という。山田さんは新聞について「その時代や人の思いを色濃く感じとれるタイムマシンのような存在と感じました」。

ライブ中継された全体会の司会を務めた山田さん（左）と古崎さん

NIE札幌大会を振り返って

北海道NIE推進協議会会長　菊池　安吉

第26回NIE全国大会札幌大会が8月16日、オンラインで開催された。「新しい学びを創るNIE～家庭、教室、地域をむすぶ～」のスローガンの下、新聞をどう活用し、教育に役立てるかを考えた。大会実行委員長を務めた北海道NIE推進協議会の菊池安吉会長に振り返ってもらった。

爽やかな夏空の下、大会会場は札幌文化芸術劇場hitaru（ヒタル）だった。基調講演では、「歴史と出会う――新聞という回路」と題して、札幌ゆかりのノンフィクション作家梯久美子さんが登壇した。

戦時中の硫黄島総指揮官栗林忠道を描いたデビュー作「散るぞ悲しき」の取材過程を通して、栗林さんの決別電報が大本営に改ざんされ新聞報道されていたことが執筆を後押ししたこと。当時の新聞紙面を見ると、どんな時代だったのかがリアルに伝わること。「歴史の縦軸として、新聞記事をていねいにつないで史実を読み解くことが重要」ということが印象に残った。歴史観を養うために新聞は有効なツールになることや子供たちが自分の育った地域の歴史を学ぶために地方紙が重要な役割を果たすことが伝わった。

●◆●◆●◆●

パネルディスカッションでは、元北海道日本ハムファイターズ選手で学校法人田中学園理事長である田中賢介さんをはじめ7名がパネリストとして登壇し、新聞とはどんな存在か、新聞のある生活、今なぜ新聞、NIEと学力、新しい学びとデジタル、新聞は面白いか等をテーマに意見が交わされた。家庭、教室、地域、学校のそれぞれの立場から生の声が引き出され、充実したものとなった。

授業を中継 新たな試みも

公開授業や学習成果はオンデマンド配信されている。8本の公開授業では、小学校・中学校は国語科、社会科、道徳、高校は総合的な探究の時間や情報科の授業で、新聞を効果的に活用する方法を探った。視聴してご意見・感想を寄せていただければ幸いです。

特別分科会「日本の産業基盤を築いた日本遺産『炭鉄港』」では、美唄中3年の社会科の授業を札幌の道新ホールの特設会場と結んで中継し、双方向性の研究討議が行われた。今後の研究大会のスタイルとして提案性のある取り組みだった。授業づくりの段階から「炭鉄港」の価値を大切にするNPO法人の理事長や炭鉱跡地の活用などを記事にしてきた新聞記者も加えて授業構成を検討してきた。専門家の視点も取り入れながら充実した学びを創り出すことができたと思う。

●◆●◆●◆●

「学校図書館とNIE」では、学校司書や司書教諭の新聞掲示板の工夫や身近に新聞を置くことで、新聞に慣れ親しみ、追究活動の種子をまくことと授業者である先生方と連携し、チーム学校図書館として機能させたいという強い願いが感じられた。

「特別支援学校・特別支援学級におけるNIE」や「アイヌ文化学習とNIE」の実践発表も提言性のある興味深いものであった。新聞記事データベースを活用した実践もあり、札幌新陽高校の金融学習や函館・亀田中の地域学習では、あふれる情報を的確に活用する力や課題解決のアイデアを生む力を育てることが重視された。紙ベースの新聞の良さを理解しながら、データベースとの使い分けが今後進むものと思われる。

今大会を通して、高校生の活躍が光った。開会式の司会や手話通訳、大会の様子を伝える記念新聞の制作、パネルディスカッションのパネリストなど、多彩な才能を発揮した。

授業の中継試みる　研究会が学習会

北海道NIE研究会（兼間昌智会長）は9月21日、公開授業を開いた。授業は録画してユーチューブでメンバーに公開し、12月に研究討議を行う。学習会の新たなスタイルを模索するため、初めて授業のライブ中継も試みた。

研究会は新型コロナウイルス感染拡大を機に、授業の録画を基に学習会を行っている。今回の授業は、札幌南高2年政治経済「資質や能力を育むNIE」。

ライブ中継は「教諭の表情や生徒の反応がリアルにわかり、録画より授業の緊張感が伝わる」（兼間会長）と取り組んだ。ただ、授業内容が十分に伝わらない点もあった。研究会は課題を整理し改めて試みることにしている。

◇おことわり　「NIE実践奮闘記」「リレーエッセー多紙彩々」は休みました。

編集後記

○…早いもので、NIE全国大会札幌大会のオンデマンド配信は残り1カ月。視聴者の感想は気になるが、「北海道らしさ」「新しい学び」をオンラインでも十分、全国に届けられているのではと思っている。

○…情報通信技術（ICT）の教育現場への浸透は目を見張る。今大会は現地開催を準備していた当初から「オンラインの利点」も生かそうと考えた。美唄中の公開授業を、60キロ以上離れた札幌と結んで二元中継した特別分科会「炭鉄港」は象徴的だ。

○…札幌では司会、助言者のほか「炭鉄港」に詳しい授業協力者らがスクリーンに映し出される授業を見つめた。美唄との間で質疑応答、助言もあった。いつもの教室で授業を受ける生徒の姿を札幌で見ながら、両会場が協同でつくる分科会は新鮮だった。

○…ハプニングもあった。準備は入念に行ったが、授業の開始直前に映像がフリーズ。無事復旧させられたが、授業を5分間ほど遅らせざるを得なかった。原因は明確でなく、オンラインの難しさも痛感した。

○…端末1人1台のGIGAスクール構想やオンライン授業。教育の現場は、この2年間ほどで大きく変わった。開催地に集い、NIEの「いま」を学び、「あす」を考える全国大会。ICTは大会にも変化をもたらすのだろうか。（坂）